特集1 島根県

文化資源として活かす「小泉八雲」

島根県立大学短期大学部 教授
小泉八雲記念館 館長
小泉 凡

小泉八雲と松江市

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン/1850-1904）は、『怪談』の著者として知られ、明治日本のフォークロアを文学として世界に伝えたギリシャ系アイルランド人作家です。八雲は島根県松江市に1890年8月から翌年11月まで1年3か月間居住し、山陰地方の基層文化の魅力と価値を世界へ発信しました。松江市では、八雲旧居の隣接地に1933年に小泉八雲記念館が建設され、2016年には大幅に増床、リニューアルされ情報発信の拠点となっています。

小泉八雲記念館

「その眼が見たもの」「その耳が聞いたもの」「その心に響いたもの」というコンセプトのもとに八雲の生涯を150点の遺品やグラフィックで紹介し、八雲の思考の特色である「オープン・マインド」を浮き彫りにしています。年に1-2回の企画展を行い、それに伴う多くの関連イベントを開催します。今年は、日本とアイルランドの外交関係樹立60年にあたり、「文学の宝庫アイルランド―ハーンと同時代を生きた作家たち―」を開催中（2018年6月まで）で、期間中にはアン・バリントン・駐日アイルランド大使の講演、館長のアイルランドトーク（3回）、夏休みの子供向け企画「ガリバー旅行記」のポップアップ絵本作り、松江水燈路にあわせたナイト・ミュージアムでのミュージックセッション、島根県立大学と連携した、おはなしゼミの学生によるアイルランド民話の読み聞かせなどを実施しています。そのほか、松江市では小泉八雲や怪談を文化資源として教育、文化創造、観光に活かす取り組みを進めています。その主要なものを以下にご紹介します。

小泉八雲記念館

子ども塾―スーパーヘルンさん講座―

スマホやゲーム機器と向き合う時間が長くなった現代の子どもたちに、八雲の五感を継承しようという地域教育プロジェクト

子ども塾2015

を２００４年にスタートさせました。五感力の欠如は不安感やコミュニケーションの不全を引き起こすとされます。素足で下駄を履く感触を楽しみ、その音を聞く。虫の音を聞き分けたり、人力車に乗ったり、松江八景を探したり、毎年、テーマを変えて松江という地域を舞台に五感体験をすることで、自分と他者の存在感を確認し、地域への関心を高めてもらいます。

子ども塾 2015

松江ゴーストツアー

城下町松江は怪談の宝庫で、その多くをすでに八雲が英文で世界へ発信しています。八雲は怪談の中には「一面の真理（ｔｒｕｔｈ）」があると言い、いずれ科学万能の時代が来ても、人々の怪談への関心は不変だと予言しています。２００８年からダブリンやニューオーリンズなどの先進事例を参考に、夜の松江をプロの語り部の怪談を聞きながら2時間かけて徒歩で巡る、「松江ゴーストツアー」を始めました。夏場の土曜日を中心に、すでに三百回余り開催し、五千人以上の参加者に恵まれました。近年では、県外者が7割をしめ、ツアー開催日にあわせて山陰旅行を計画される方もみられます。夜の松江を耳で楽しみ、闇への畏怖の念を思い起こし、語りの感動を味わうというのがコンセプトです。

松江ゴーストツアー

ゴーストツアーちらし

松江怪喜宴

現代怪談の旗手で『新耳袋』の著者である木原浩勝さんと一緒に、年に一度、怪談の可能性を探る、「松江怪談談義」を行っています。また、地酒を味わいながら、声優の茶風林さん率いる「怪し会」のメンバーによる朗読を楽しむイベントも同時開催し、「松江怪喜宴」と名付けています。木原さんから、境港は「妖怪」、出雲は「神々」、雲南は「神話」でアピールしているから、松江は「怪談」で行こう！という提案が。ゴーストツアーとあわせて、「怪談のまち」という新しい一面の模索が始まりました。「怪談のまち」は「不気味なまち」ではなく、「ご縁を大事にするまち」なのです。縁は人智を超えた力のことで、

縁への畏敬の念が怪談を継承する原動力となっていると思うからです。

小泉八雲朗読のしらべ

松江出身の俳優佐野史郎さんと、同じく松江出身の世界的なギタリスト山本恭司さんによる、小泉八雲の作品を朗読と音楽で堪能するユニークな文化イベントを、毎年、テーマを変えて実施しています。今年は「夢幻―夢とうつつのあわいに現れるものたち―」。いわばおふたりのライフワークです。監修をつとめる筆者も導入と作品解説のトークを行います。今年で11回目を迎え、全国から追っかけの皆さんが来松してくださるようになり、文化創造への寄与とともに交流人口の増加にも貢献しています。また松江以外の各地から公演依頼が届くようになりました。２０１４年にはギリシャの２都市で、２０１５年にはアイルランド３都市での海外公演も行い、大きな反響を得ました。

朗読のしらべ松江

オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン・プロジェクト

「オープン・マインドこそ八雲の特長的な精神性！」と訴えたのは、半世紀近く八雲を愛読してきたギリシャ人のタキス・エフスタシウ氏。確かに、西洋・キリスト教・白人・人間を中心とした世界観を嫌った八雲です。タキス氏は「オープン・マインドは21世紀に必要な思考だから、現代アートで世界中の人に理解してもらおう」と提案し、このプロジェクトが結成されました。八雲の生き方に興味をもつ世界のアーティストが造形作品を出展し、２００９年にアテネ、２０１０年に松江、２０１１年にニューヨーク、２０１２年にニューオーリンズで講演会とアート展を開催。２０１４年には八雲の生誕地であるギリシャのレフカダで、彼のオープン・マインドを検証する国際シンポジウムを開き、「自分が思っていることが絶対ではなく、最終の結論でもなく、そこから次に新しい道が開かれていく。子どもたちには常にそういう新しい道を開いていこう」という方向性を確認しました。

経済一辺倒だった時代を経て、持続可能な共生社会が求められるいま、作家や文学は愛読者の鑑賞対象、研究者の研究対象、愛好者の顕彰対象という枠を超えて、文化資源・地域資源として社会に活かされる時代を迎えています。

The Open Mind of Lafcadio Heaen